

# 小・中・高校時代の福田恆存——新資料を用いて

川久保剛

はじめに

本稿では、小・中・高校時代の福田恆存（昭和期に活躍した思想家。一九二一—一九九四）について取り上げる。

小・中・高校時代の福田を主題化した先行研究は存在しない。それゆえ本稿は、福田研究に寄与する面があると思われる。

本稿で用いる資料は、福田みずからが小・中・高校時代を振り返っている文章、同級生が当時の福田について述べている文章、在籍した学校の年史などである。

その中には、これまで単行本に収録されず、福田に関する基礎データといえる『福田恆存全集』（文芸春秋）の「年譜」（第七巻所収）にも

記載がない資料、つまり新資料も含まれる。

福田が中学時代について回顧した文章である「苦言」（『東叡新聞』昭和二年一〇月）と「いい意味のスパルタ教育」（『高藤太一郎先生を追憶する』高藤太一郎先生を追憶する会、昭和六年<sup>①</sup>）とがそれぞれである。

また高校時代に福田が学内誌に発表した次の二つの文章も新資料といえる。

・「我国新劇運動の過去と現在」（『浦高時報』昭和七年六月一四日<sup>②</sup>）

・「生動的芸術の諸要素に就いて」（『学友会雑誌』第一九号、浦和高等学校学友会、昭和七年二月<sup>③</sup>）

本稿では、こうした資料をまじえて、小・中・高校時代の福田の一面を明らかにしていきたいとおもう。

結論を先取りすると、本稿では、以下の点を明らかにすることになる。

- ・ 福田が学んだ小学校と中学校はともに、大正リベラリズム（自由主義）教育・大正デモクラシー（民主主義）教育の先進校であった。
  - ・ しかし福田は、その教育に対して疑問を抱いていた。
  - ・ 福田の高校時代は、全国の高校で学生運動・政治運動が隆盛を極めていた。しかし福田は、そうした動きにはまったく関心をもっていなかった。
  - ・ 高校時代の福田は、演劇青年だった。しかし福田は、時代の主流だった左翼政治演劇には興味がなかった。福田が関心を持っていたのは、政治とかかわりをもたない純粹芸術志向の演劇だった。
  - ・ 高校時代の福田は、アドルフ・アピアの舞台芸術論に関心をもっていた。
  - ・ 高校時代の福田は、現代思想や現代文学にも関心をもっていた。とくに小林秀雄の批評におおきな関心をもっていた。
- 以上の点が本稿で明らかとなった点である。いずれも福田の思想を読み解く上で重要な事柄であると思われる。
- 以下まず小・中学校時代を取り上げ、次に高校時代を取り上げる。なお大学時代の福田については、他稿を期したい。

## 一 小・中学校時代の福田

### ——大正リベラリズム／デモクラシー教育の中で

#### (1) 小学校時代

上述のように、福田が学んだ小・中学校は、大正リベラリズム（自由主義）／デモクラシー（民主主義）教育の先進校という特色をもっていたということが出来る。

大正リベラリズム／デモクラシー教育とは、生徒の個性と人格、そして自主性を重んじる点に特徴がある。これは、画一的・注入的であった明治教育の見直しという性格をもっている。

大正リベラリズム／デモクラシー教育の先進校というと、成城学園などの私立の学校を思い浮かべるが、公立のなかにも先駆的な取り組みで知られた学校が存在した。錦華小学校もそのひとつである。

福田は、大正八年に、錦華小学校に入学。夏目漱石なども輩出した名門校（創立は、明治六年）ということで、父親にすすめられて、学区外から入学した。同級生には、高橋義孝（ドイツ文学者、文芸評論家）がいる。

では、錦華小学校では、どのような取り組みが行われていたのだろうか。おもに以下の二点が挙げられる。

まず自学自習や自由研究の時間の導入である。第一時間目は、自学自習や自由研究の時間にあてられていた。これは当時のカリキュラム

においては画期的なことであった。

次に、工作における自由画の導入である。課題画が前提の時代に、自由画を取り入れたのである。同校では、昭和になると、作文においても自由画が取り入れられるようになったようである。

こうした先進的な取り組みによって、錦華小学校は全国的に注目を浴びることになった。おおくの参観者が同校を訪れた。ちなみに、こうした取り組みに着手したのは、高羽幸槌校長（明治四十一年着任）だった。<sup>(5)</sup>

このように福田は、先端的な大正リベラリズム／デモクラシー教育を受けた。それは福田の力をおおきく伸ばしてくれたことであろう。

しかし反面、福田には、疑問に感じられる点もあった。それはこういうことである。

福田が小学校五年のとき、関東大震災（大正一二年九月一日）がおこった。周知のように東京は灰燼に帰した。おおくの市民が、しばらくの間地方に避難生活を送ることになった。福田も同様であった。

福田が学校に戻ったのは、翌年の三月だった。試験にはなんとか間に合うことができた。終業式を数日後にひかえたある日、福田は担任のK先生に校庭の隅に呼び出された。福田は、三年四年と優等を続けており、試験の結果、今年も優等の資格は十分にあるのだが、それをM君にゆずってもらえないかという相談だったという。福田は二期を全休しているが、M君は、罹災後も焼け跡に掘立小屋を建てて、

学校が再開するとすぐに通ってきた。しかし試験の結果は、優等の次点だったというのである。

ここからは福田の文章を引用しよう。

そのことに私は不平をいだきませんでした。K先生からその話を聴いてみると、私のうちに不満の感情はぜんぜん生じなかつた。私は実質的に優等なのです。それで満足でした。しかも、そのうへ、友人に優等を譲り、先生の顔をたて、自分は平及第にたへるといふ「英雄的な悲壮感」も味はへたのであります。文句をいふべき筋あひではありません。それにもかかはらず、そのとき、K先生の話聴いてみた私を感じたものは、いひやうのない不快感だった。さういふ打明け話をする先生にたいして、私は子供心に不快を感じたのです。いや、それ以上でした。私はほとんど軽蔑に近い感情をその先生にいだいたのであります。いま大人である私がではなく、当時子供の私がつきりそれを感じとつてゐたのです。今日流にいへば、K先生の態度は「民主主義的」といふものでせう。児童を一個の人格として対等に扱ひ、職員会議の内情を明してくれたのですから。しかし、それは今日流に考へても行きすぎではなかつたか。その証拠に、とにかく私は不愉快だった。「一個の人格として対等に」扱はれてゐるといふ喜びなど皆無だったのです。（中略）私は決して一個の人格として扱はれてゐたのではない。児童を一個の

人格として扱ふべしといふ「教育理論」の実験に使はれただけです。それも、私だけではない。K先生その人も「新教育理論」の道具にすぎなかつたのです。私の目の前にゐた先生も一個の人格ではなかつた。

当時、子供の私がそれだけの分析をしたといふのではない。が、今でもそのときのK先生の表情をはつきりおぼえてをります。そこにはふやけた笑顔があつた。その「理解のある」笑顔に私は虚偽を感じとつたのです。それは、人格と人格とが生きて相対してゐないといふ感じ、先生と自分との間の人間関係が本物ではないといふ感じであります。教師が怒りに任せて生徒を打つときにも感じられる生きた人格の真実が、そこには欠けてゐたのです。(中略)このばあひ教師は相手の生徒を信じてゐないばかりでなく、それにたいする自分の態度にも信を置いてゐない。といふことは、結局、人間相互の接触において、最初にあるべきもの、そして最後に残るべきものである自然発生的なものを信じてゐないといふことです。つまりは人間不信ではないか。<sup>(6)</sup>

大正リベラリズム／デモクラシー教育に対する反感というよりも、大正リベラリズム／デモクラシー教育という「新教育理論」を実践することに自己満足を感じている教師に対する反感といふことができよう。

このあとですぐに見るが、福田はこうした疑問・反感を、中学時代にも抱いている。

以上が、資料から見えてくる、小学校時代の福田の一側面である。繰り返しになるが、一部、「新教育理論」に自己陶醉する教師に対する反感はあつたにせよ、同校の先進的な取り組みは、福田の可能性を広げてくれたことであろう。

錦華小学校の『創立百拾年史』が存在する。そのなかには、「夏目漱石先生、永井龍男先生、波多野完治先生、福田恒存先生、そのほか幾多の学術文化の巨人を輩出」とある。<sup>(7)</sup>

ちなみに同校は、平成になってから、近隣の小川小学校、西神田小学校と合併し、現在、千代田区立お茶の水小学校となっている。

#### (2) 中学校時代

では次に、中学時代についてみよう。福田は大正一四年に、第二東京市立中学、通称・二中に入学している。

二中は、東京市長・後藤新平が、関東大震災(大正一二年九月)の復興計画の一環として、第一東京市立中学とともに、大正一三年に新設した。上野の森の中にあり、戦後の学制改革で、上野高校となつてゐる。

福田が二中を受験したのは、小学校の先生に、「校長が偉いから」とすすめられたことによる。<sup>(8)</sup>

その校長の名は、高藤太一郎。高藤は、いくつかの師範学校の校長を経て、二中の初代校長に就任。リベラリズム教育を積極的に推進した。

まず高藤は、「自主協調」を校訓にかかげた。そして、自学自習や学校自治を重視した。それゆえ二中は、「リベラル二中」と称されるようになった。<sup>(9)</sup>

それでは在学中の福田は、「リベラル二中」についてどのような思いを抱いていたのだろうか。

まず福田は、高藤について次のように述べている。「高藤校長は——引用者注）は、全校の生徒の名前を全部知っていて、父親の職業までも覚え込んでいました。ほんとうに教育者だ、と今も感銘しています」<sup>(10)</sup>（「いい意味のスパルタ教育」）。福田が高藤校長から感化を受けていたことがわかる。

ちなみに高藤は、二中を名門校に育てるべく、優れた教師陣を集めた。その中には、時枝誠記（国語学）や西尾實（国語学）など、のちに一級の学者として活躍する者も含まれていた。この点についても福田は、「人物のうへでも学識のうへでも敬服すべき先生が多かつた」<sup>(11)</sup>（「苦言」）と述べている。後述のように二中時代の恩師の何人かは、福田の人生に決定的な影響を与えている。

しかしその一方で福田は、二中時代を「煉獄の生活」とも呼んでいる。なにゆえ「煉獄」であったのか。その理由を福田は、こう述べて

いる。

高藤校長とすれば、一日もはやく二中を定評ある学校にしたであげたかつたのだらうし、だれが見てもあれはいかにも二中の生徒らしい少年だといふ校風をつくりたかつたのだらうとおもふ。いはば校風は上から与へられた。もちろん教育とはさういふものであり、いかに自主的といはうか——いや、その自主協調といふのがじつは二中のモットーだつたので、をかしなことだが、この自主の精神が他動的にそとからおしつけられ、ぼくたちはこの合言葉を口に叫びながら、ひどく受動的でひっこみじあんで、お坊つちやんだつたのである。もし二中の二中らしい校風があつたとすれば、さういふ善良な育ちの良さとでもいふものだつたらう。

が、おそらくそれは高藤校長以下の先生がたの予期に反したものがあつたにさういない。（中略）わが二中では、先生があまり親切で自主精神といふレベルまでこしらへてくださったので、生徒はどうにも動きがとれず、いろいろ息ぐるしかつたのだとおもふ。

おそらく心のかたまらぬぼくたち少年の、さうした息ぐるしさは、当時の先生たちには——善意と親切に満ちておればあるほど——気づかれなかつたのではないかとおもふ（前掲「苦言」<sup>(12)</sup>）。

小学校時代に抱いた反感と同質であるといえよう。生徒が教師の自

己満足の犠牲になっていることへの反感といえよう。

以上のように福田は、小学校と中学校を通して、当時最先端の大正リベラリズム／デモクラシー教育を受けたといえる。福田自身、みずからについて、「大正期の所謂自由主義的思潮の中で青少年期を送った」〔軍の独走について〕<sup>(13)</sup>と述べている。その環境は、福田の可能性をおおいに伸ばしてくれたことであろう。尊敬し、親しみを感ずる先生も多かった。しかし反面、福田は、大正リベラリズム／デモクラシー教育という「新教育理論」を実践して自己満足する教師や学校に反感を感じていた。小・中学時代の福田にはこのような両面性を見ることができるといえる。

補足であるが、福田は二中でも高橋義孝と同級生となっている。また同級生にはほかに、山崎正一（哲学者）などもいた。またかなり後になるが、中村雄二郎（哲学者）も同校を卒業している。中村は後年、福田の主宰する勉強会（アルプス会、一九五六年〜）に参加したり、いくつかの福田論（「福田恆存論の試み」など）を発表したりしている。演劇的人間・社会観という点で、福田と中村には共通点がある。この点については他稿で扱いたいと思う。<sup>(14)</sup>

## 二 高校時代の福田——演劇、批評へ

### (1) 学生運動から距離をとる

福田は、昭和五年、旧制・浦和高等学校、通称・浦高に進学する。浦高は戦後の学制改革で埼玉大学となる。

浦高は、武蔵野の豊かな自然に抱かれ、明るく、リベラル（自由）な校風で知られていた。

人気が高く、福田が受験したころは、東京高等学校や第一高等学校と並ぶ全国屈指の難関校だった。毎年受験シーズンになると、上野駅から受験生を乗せた臨時列車が走り、風物詩となっていた。福田もこの電車に乗り込んだことであろう。<sup>(15)</sup>

当時、中学の修業年限は五年だったが、飛び級して四年修了で高校受験できる仕組みがあった。いわゆる「四修」である。福田もこれに挑戦したが、結果は不合格。正規の五年修了による進学となった。

旧制高校は、文科と理科にコースが分かれ、それぞれ第一外国語の種類によって、甲類（英語）・乙類（ドイツ語）・丙類（フランス語）の三クラスに分かれていた。福田は、文科・甲類（英語）に進学した。

さて、浦高時代の福田はどんな学生だったのだろうか。

福田の在学中、全国の高校では、学生運動の嵐が吹き荒れていた。その背景には、昭和に入るところから悪化した経済状況があった。福田

の在学期間と重なる昭和六、七年には、全国の高校で、同盟休校が頻発、学生の検挙や処分件数はピークに達した<sup>(16)</sup>。

浦高も例外ではなかった。しかし、福田が学生運動に関わった形跡はない。

福田が入学してほどなく、浦高では、前年に次ぐ二度目の同盟休校騒ぎが起こった。当時全国の高校では、文部省からの派遣講師による、学生の「思想善導」を目的とした講演会が相次いで開催されていた。このような講演会が福田の入学直後、浦高でも開催されたが、左派の学生新聞が、講師をからかう記事を掲載。学校が関係学生に停学処分を下したことが同盟休校騒ぎの発端だった。

学生新聞は、全校生徒に同盟休校を呼びかけ、ほとんどのクラスはこれに応じた。しかし福田のクラス、つまり文科甲類の一年生だけは、ストライキの理由が不明確であるとして、これに参加しなかった。もともと学生新聞が、無理に同盟休校に持ち込んだきらいがあり、一般学生の間には、冷めた反応もあったようである。騒乱は、関係学生の陳謝によって終息した。

しかし、この一件以降も、浦高の「シュトゥルム・ウント・ドラムク（疾風怒濤）の時代」（『瑤沙抄誌』）は続いた。だが、以後も、福田が学生運動に興味を示した形跡はない<sup>(17)</sup>。

## (2) 演劇青年

では、当時の福田の関心は、どこにあったのだろうか。それは第一に、演劇にあったようである。高校時代、福田は、「劇作家にならうと思つてゐた」（『私の演劇白書2』<sup>(18)</sup>）のである。

これには、幼少期から母親の影響で演劇に親しんできたということも関わっていたであろう。しかし直接のきっかけとなったのは、二中時代のふたりの恩師からの影響だった。

そのひとり、落合欽吾である。福田は、落合からの影響が「演劇に向かった決定的な原因」であり、高校時代に「初めて書いた戯曲をお見せして批評を頂き、その後も戯曲を書くたびに見て」（『前掲』<sup>(19)</sup>）意味での「スパルタ教育」も受けたと述べている。当時落合は、二中を退任し、新潟高等学校（現在の新潟大学）に転出していたが、「なぜか先生と私とはうまが合ふらしく、その後も文通が続き、中学卒業後も、上京される度にお目にかかったものである」（『覚書三』<sup>(20)</sup>）と福田は記している。

もうひとり、横山藤吾である。

三年生の時でしたが、作文で初めて三重マルを下さったのです。それまでの作文はふつう平叙体の地の文章で書きました。でいつも点が悪かったのですが、その時は別になんの下心もなしに偶然会話体で書いたのです。そしたら「きみは会話というのを実にうまく使

える」というお褒めにあずかった。こじつけのようですが、いまふりかえてみると、それが切っかけかもしれない。高校時代には英文でいろいろ戯曲を読みあさりましたから（前掲「いい意味でのスバルタ教育」<sup>(21)</sup>）。

このようなきっかけによって福田は、演劇に対する関心を深めていった。

高校時代、最初に手に取った戯曲は、ストリンドベリーだった。その後、「チェーホフ、イブセンを始め、近代劇全集に読みふけり、シングやグレゴリーやゴルズワージーを原書で読みはじめた。シェイクスピアには最も興味を感じたが、これは逍遙訳で、原書は大学時代に入ってから始めて読んだ」（叙事詩への憧れ<sup>(22)</sup>）。

同級生だった金田一春彦は、「福田君は当時から何か英語の原書のようなものを小脇に抱えて歩いていた<sup>(23)</sup>と述べているが、その原書とは、「シングやグレゴリーやゴルズワージー」などであったことだろう。

また、ここに出てくる『近代劇全集』は、当時第一書房から刊行されていた全四三巻の戯曲全集である。いわゆる円本である。福田の時代の劇作家には、なじみのシリーズである<sup>(24)</sup>。

劇場にもよく足を運んだ。新劇（近代劇）が中心だった<sup>(25)</sup>。

### (3) 「我国新劇運動の過去と現在」

当時の新劇界は、左翼政治思想に立つプロレタリア演劇によって独占されつつあった。

しかし福田は、こうした新劇の政治化という状況に対して、ひとつの文章を書いて、疑問を呈している。高校三年のときに、『浦高時報』（昭和七年六月一四日）の「文藝欄」に発表した「我国新劇運動の過去と現在」がそれである。これは、表題に示されているように、新劇の全体像を福田なりに描き出したものである。

それによると、日本の新劇は、坪内逍遙の「文藝協会」や小山内薫、市川左団次の「自由劇場」にはじまり、守田勘彌の「文藝座」や市川猿之助の「春秋座」を経て、小山内薫に率いられた「築地小劇場」で一応の到達点に達した。

しかし、小山内の死によって「築地小劇場」が解散する（昭和四年）と同時に、新劇界は、急速に政治的傾斜を深め、現在では「マルキシズム宣伝機関」の様相を呈している。

しかし、このまま「芸術」としての「演劇」は消滅してしまってもいいのだろうか。「世間」の「嘲笑を恐れて左に許りよろめく必要が何処にあるのか」。

福田はこのように問いかけたうえで、その年（昭和七年）の二月に、友田恭介、田村秋子によって創設された「築地座」に注目する。

「築地座」は、「築地小劇場」の小山内路線を継いで、「芸術」として



の「演劇」の復興を旗印に掲げていたからである。

福田は、「築地座」への期待を表明して、文章を閉じている。

前述の学生運動へのスタンスと同様、ここでも福田は、政治的左傾化の風潮に対して距離をとっている。

福田は、かならずしも、マルクス主義やその運動を批判しているわけではない。ただ、政治が芸術を利用することに疑義を呈しているのである。また、ひとびとが時代の風潮に流されていくことに批判を投げかけているのである。

また福田は、「我国新劇運動の過去と現在」において、「築地座」の提唱する「創作中心主義」にも賛同を示している。

「創作中心主義」とは、日本人の手になる創作劇を上演戯曲の中心に据えようという考え方である。こうした主張の背景には、次のような反省が存在した。これまでの新劇は、翻訳劇が中心だった。反対からいえば、日本人の手になる創作劇はほとんど存在しなかった。それが、日本における新劇の定着を阻害してきたのではないか。

#### (4) 「或る街の人」

福田は、こうした見方に賛同を示し、「創作中心主義」の歴史的意義を強調している。そして福田は、それに止まらず、「築地座」の創作戯曲の募集にみずから応じていった。

「築地座」は、繰り返しになるが、昭和七年二月に、友田恭介、田

村秋子によって創設された。ふたりは、夫婦であり、もともと「築地小劇場」の代表的な俳優として活躍していたが、同劇団の解散後は、左翼プロパガンダ劇とは一線を画した活動（「新東京」の創設など）を展開していた。

「築地座」の顧問には、久保田万太郎、里見弴、それに岸田國士が就き、文芸部員として、大江良太郎、八住利雄が参画した。

友田は、第一回公演（二月二〇～二二日）のパンフレットに「『新しき作者をのぞむ』——築地座創設に際して」と題した一文を寄せ、「創作劇をできるだけ沢山やっていく」と宣言。続けて、次の「築地座上演戯曲募集」を掲げた。

- 隠れた若い作家を不振な戯曲壇に紹介すべく、築地座上演脚本を募集いたします。
- 枚数に制限を附しません。自由な気持ちで自信のある作品をお送り下さい。
- 賞金は差しあげられませんが、いいものは、築地座の上演目録に入れていきます。
- 原稿の返送御希望の方は、その由ご一報下さい。
- 選者は久保田万太郎、岸田國士氏をご依頼しました。

福田が応じたのは、この募集だった。このことに関して、福田は次

のように回顧している。

わたくしが芝居を観はじめたのは、築地座分裂後のプロレタリア演劇のころで、ほとんど定期的に観るようになったのは築地座からなんです。築地座はほとんどはじめから観ています。あのころはいまと違って舞台にはゆる「芸術的陶醉」も感じておりましたね。

(中略)当時、築地座が戯曲募集ということをやって、そのときに応募して、その締切りが五月ごろで気がついたときに締切り間近だったので友田恭介さんに手紙を出して延してもらったんです、一月くらい延ばしてもらって、早速書きはじめました(福田恆存・田中千禾夫「対談・福田恆存氏に聴く」新劇と近代文化<sup>(26)</sup>)。

こうして書きあげた作品の題名は、「或る街の人」。前述の、落合の指導を仰いで高校時代に「初めて書いた戯曲」とは、この作品のことである。

応募には、半年でたった九篇しか集まらず、当選作は選ばれなかったが、佳作二篇が選出され、福田の「或る街の人」と、小川正夫の「二十九歳」が選ばれた。

しかしその後、戯曲専門誌の『劇作』に掲載された、川口一郎の作品「二十六番館」が横滑りの当選作となり、第六回公演で上演される運びとなった。川口は当時、アメリカ修業から帰国したばかりの新

人の劇作家だった。『劇作』は「築地座」の創設と同時期に創刊され、岸田國士とのつながりもあり、「築地座」とは結びつきが強かった。

川口の「二十六番館」は、上演されると、岸田國士や正宗白鳥、辰野隆など「築地座」の顧問格の文人たちから激賞されることとなった。福田もそれを観て、「なるほどこれは私など及びもつかぬと思つた」(覚書五<sup>(27)</sup>)という。

ふたたび福田の回想をきこう。

その『二十六番館』上演後に築地座でお祝いがあつて、わたくしも呼ばれて行つたんですが、里見淳さんの祝辞で始まって会の終りの頃、友田さんが、「この席上に福田さんと小川さんがいらっしゃるはずですから立ってください」といわれて、そのとき私が立上つたのを見て、友田さんは、始めて私が高校生の青二才であることを発見したわけで、あの時の友田さんのバツの悪そうな顔はいまだに忘れられません、「しまった、こんな子供のものを取っちゃった」(笑)という顔で、私もはずかしくなって下を向いてしまいました。友田さんは、帰りがけには「手を入れて上演する可能性があるからそのつもりでいてください」といつてくれましたが、友田さんが競争にいつてしまつて、どうやら失くなくなつてしまつたらしい<sup>(28)</sup>。

このように、福田の作品が上演されることはなかった。またその原

稿も、失われてしまった。しかし「或る街の人」は、福田の演劇人としての出発を画す作品として、記念碑的な位置にあるといえよう。

「築地座」（昭和七年二月〜昭和十一年二月）も、わずか四年で幕を閉じることとなったが、昭和一三年に、後身として創設された「文学座」は周知のように、戦後の新劇界に大きな功績を残すこととなる。福田も、その中心人物として活躍することになる。<sup>29)</sup>

#### (5) アピアを翻訳

ところで福田は、高校三年のときに、演劇がらみで、もうひとつ文章を発表している。「生動的芸術の諸要素に就いて」（『学友会雑誌』第十九号、浦和高等学校学友会、昭和七年一二月）である。これは、アドルフ・アピアの論文“L'Oeuvre D'Art Vivant”（一九二二）の第一章の翻訳であり、Rosamond Gilderが仏語から英訳して、この年の“ Theatre Arts Monthly”八月号に掲載したものを底本としている。アピア（Adolphe Appia, 一八六二—一九二八）は、現代舞台芸術の父と称される人物である。照明と音楽が舞台において持つ意味や効果を探究したことで知られている。<sup>30)</sup>

この論文でも、照明と音楽の意味・効果を中心とした独自の舞台芸術論が展開されている。それによると、照明には、俳優の動作を舞台空間に結合させる効果があり、音楽には、同じく俳優の動作を、舞台に流れる時間に結合させる作用がある。

福田は、解説文のなかで、アピアのアイデアによって、演劇に「新たな生命」が付与されるであろうと絶賛している。

また「新劇運動の機運」が見られる近年の日本において、大きな意味を持つであろうと述べている。

ここで福田のいう「新劇運動の機運」とは、「築地座」の創設とその活動を指しているものと思われる。

当時の福田は、「築地座」の動きを意識しながら、またアピアなどの新たな演劇理論に触れながら、来るべき新劇を構想しようと模索を続けていたということができよう。

#### (6) 小林秀雄の「批評」と出会う

しかし高校時代の福田の関心事は、演劇だけではなかった。福田は、当時の先端的な哲学、思想、文学などにも広く興味を示している。

福田は、高校から大学にかけて、哲学・思想書では、「ニーチェやフッサールやベルクソンやフロイトを愛読」。文学書としては、「ドストエフスキー、ストリンドベリ、スタンダール、フローベールなどに夢中になった」。また「マルクス」の理論にも触れ、その「思惟」の「方法」に興味をもったという（前掲「叙事詩への憧れ」<sup>31)</sup>）。

しかし、なかでも強く惹かれたのは、小林秀雄の「批評」だった。その小林秀雄の最初の評論集『文藝評論』（白水社）が刊行されたのは

昭和六年七月。福田が浦高二年生のときだった。同書には、「からくり」「様々なる意匠」「志賀直哉」「アシルと亀の子(一―四)」「文学は絵空事か」「物質への情熱」「横光利一」「マルクスの悟達」「文藝時評」「批評家失格」(昭和五年一〇月)、「批評家失格」(昭和六年二月)、「心理小説」などの文章が収められている。

福田は、この評論集によって、小林を知ったようである。そして、その内容はもちろんのこと、小林の「批評」という思考・表現のスタイルに魅了されたという。後年福田は、「小林秀雄のうちに自分を生かす方法を直観した」、「いはば、ぼくは小林秀雄に「歩き方」の魅力を感じたのだ」(誠実といふこと——小林秀雄との出あひ——)<sup>32</sup>と述べている。

このように高校時代の福田は、哲学、文学から社会科学まで幅広く関心を持ちながらも、「演劇」と「批評」という二つの方法に惹かれ、そこに自分を生かす道を発見しつつあったといえよう。のちに福田は、「批評」と「演劇」の両方の領域で、おおきな仕事を残すことになる。

### おわりに

以上が、資料によって浮かび上がってくる、小・中・高校時代の福田の一面である。

そこから言えるのは、この時代にすでに、後年の福田の片鱗が見られるということである。

他者を忘れた自己陶醉に対する嫌悪、時代の主流である左派の政治運動に対する疑問や距離感、芸術としての演劇の追究、批評という方法による思考・表現である。

おそらく、これらは、すべて一点で結びついていたことであろう。では、その一点とは何であろうか。このエッセンシャルな問題は、もちろん本稿では扱えない。後日、他稿で果たしたい。

新資料の調査・利用については、埼玉大学研究協力部図書情報課の小野寺伸氏に格別のご協力を賜りました。深く謝意を表します。

また福田逸氏には、新資料の利用に関してご高配を賜りました。心より御礼申し上げます。

千代田区立お茶の水小学校校長の小林勇司氏、並びに東京都立上野高等学校副校長の大野哲也氏にも、資料面で大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。

### 注

(一)「いい意味でのスバルタ教育」(高藤太一郎先生を追憶する)『高藤太一郎先生を追憶する会 昭和六一年』には、編集部によって下記の注が付されている。「昭和53年1月の母校講堂における講演要旨PTA新聞と、同年秋の同窓会五十周年記念『東叢』第9号収載・当時東城会長との座談会記

- 録より抄出転載しました。ここに挙げられている二つの資料についても調査・収集が求められる。また「苦言」(『東叡新聞』昭和二十四年一月二一日)については、中澤伸弘「福田恆存の逸文」(『会報あらたま』荒魂之會、平成一七年四月一〇日)が触れている。本稿筆者は同文によって「苦言」の存在を知った。
- (2) 埼玉大学図書館官立浦和高等學校記念資料室所蔵
- (3) 同上
- (4) 中野光『大正自由教育の研究』(黎明書房、昭和四三年)、斎藤之誉「大正自由教育期における地理科自学輔導論の実践的展開」(麗澤学際ジャーナル)第一八巻第二号、二〇一〇年秋、参照。
- (5) 『錦華の百年』(錦華小学校創立百年記念会、昭和四九年)、『錦華の百拾年』(創立百拾年記念誌委員会、昭和五八年)、『目で見る錦華百一〇年記念誌』(東京都千代田区立錦華小学校創立百一〇年記念事業協賛会、平成五年)参照。
- (6) 福田恆存「教育・その本質」(『福田恆存全集』第四巻、文芸春秋、昭和六二年)二九七—三〇〇頁。
- (7) 前掲『錦華の百拾年』三二〇頁。
- (8) 福田恆存「覚書一」(前掲『福田恆存全集』第一巻)六五六—六五七頁。
- (9) 前掲『高藤太一郎先生を追憶する』参照。
- (10) 前掲「いい意味のスパルタ教育」二五三—二五五頁。
- (11) 福田恆存「苦言」(『東叡新聞』昭和二十四年一月二一日)二二頁。
- (12) 同上
- (13) 福田恆存「軍の独走について」(前掲『福田恆存全集』第五巻)三八五頁。
- (14) 「アルプス会」については、前掲「年譜」(『福田恆存全集』第七巻)六九〇頁参照。中村雄二郎が福田に触れている文章としては以下のものがある。「福田恆存氏と社会科学論」(『日本文化の焦点と盲点』昭和三九年、河出書房)、「福田恆存論の試み」(『日本』昭和四〇年二月、『日本の思想界』
- 勁草書房、昭和四二年所収)、同「福田恆存氏の自己劇化とシンセリテイ」(『図書新聞』昭和四〇年九月一八日、前掲『日本の思想界』所収)、鈴木忠志・中村雄二郎「劇的言語」エッセ・スタンダード石油株式会社広報部、昭和五年)。
- (15) 『瑤沙原誌』(旧制浦和高等學校開校五十周年記念事業委員会、旧制浦和高等學校同窓会、昭和四八年)、『瑤沙抄誌』(旧制高等學校物語 浦高篇)、『財界評論社、昭和四〇年)、原文兵衛『以友輔仁』(鹿島出版会、平成七年)、秦郁彦『旧制高校物語』(文芸春秋、平成一五年)参照。
- (16) 前掲『旧制高校物語』参照。
- (17) 前掲『瑤沙原誌』、『瑤沙抄誌』(旧制高等學校物語 浦高篇)、『以友輔仁』参照。
- (18) 福田恆存「私の演劇白書2」(『雲』第三号、現代演劇協会、昭和三九年)五五頁。
- (19) 前掲「いい意味でのスパルタ教育」参照。
- (20) 福田恆存「覚書三」(前掲『福田恆存全集』五九七頁)。
- (21) 前掲「いい意味でのスパルタ教育」参照。
- (22) 福田恆存「叙事詩への憧れ——偶然にまかせて選んできた書物——」(『日本読書新聞』昭和二七年九月一五日)、『福田恆存全集』未収録。「年譜」(『全集』第七巻には記載あり)七頁。
- (23) 金田一春彦「福田恆存君を偲ぶ」(『THIS IS 読売』平成七年十二月)。同じく同級生の原文兵衛(警視総監、参議院議長歴任)は「文科甲類のクラスでは席がアイウエオ順になっていたので、先日亡くなった劇作家の福田恆存君と机を並べていた。私は柔道三味、福田君は当時からシェイクスピアを原書で読んでいた青年」(前掲『以友輔仁』)と述べている。
- (24) 大笹吉雄『日本現代演劇史(昭和戦中篇II)』(白水社、平成六年)一六六、一三九頁参照。
- (25) 前掲「私の演劇白書2」五五頁。
- (26) 福田恆存・田中千禾夫「対談・福田恆存氏に聴く」新劇と近代文化

- (26) 『新劇』昭和三八年六月) 六五頁。
- (27) 福田恆存「覚書五」(前掲『福田恆存全集』第五卷) 六一〇頁。
- (28) 前掲福田恆存・田中千禾夫「対談・福田恆存氏に聴く」新劇と近代文化」六六頁。
- (29) 築地座については、田村秋子・内村直也『築地座——演劇美の本質を求めて——』(丸ノ内出版、昭和五一年) 参照。文学座と福田とのかかわりについては、大笹吉雄『日本現代演劇史(昭和戦後篇上)』(白水社、平成一〇年)、北見治一『回想の文学座』(中央公論社、昭和六二年)、遠藤浩一『福田恆存と三島由紀夫』(上下) (麗澤大学出版会、平成二二年) など参照。
- (30) 遠山静雄『アドルフ・アピア』(相模書房、昭和五二年) 参照。
- (31) 前掲「叙事詩への憧れ」七頁。
- (32) 福田恆存「誠実といふこと——小林秀雄との出あひ——」(『文藝評論』昭和二四年四月号) 一一二頁、前掲『福田恆存全集』第一巻、三八六—三八七頁。
- \*川久保剛(かわくぼつよし) 昭和四九年生。上智大学卒業。専攻「日本思想史」。現在、麗澤大学外国語学部准教授。著書に、『日本思想史ハンドブック』(荻部直、片岡龍編、新書館、二〇〇八年、共著) など。近刊に『福田恆存』(ミネルヴァ書房「日本評伝選」)。その他論文に、「廣池千九郎と伊藤証信——「精神運動」の思想史に向けて」(『比較思想研究』第三五号・別冊、二〇〇八年) など。